

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：21502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04562

研究課題名（和文）「現実探求としての生活綴方」の理論形成と変容

研究課題名（英文）Study on the Formation and Transformation of Kokubun Ichitaro's Seikatsu - Tsuzurikata

研究代表者

安部 貴洋（ABE, Takahiro）

山形県立米沢栄養大学・健康栄養学部・教授

研究者番号：50530143

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近年の教育学におけるメディア論をもとに、国分一太郎における「現実探求としての生活綴方」理論の形成から批判までの変化を考察した。北方性教育運動に関わるなかで国分は言語と生活を関係づける生活綴方理論を形成するが、1936年以降生活綴方を批判し文章表現技術指導のみに限定するようになる。さらに、国分の理論の変化には「言語と生活」の関係のみならず「子どもと教師」の関係の変化も含まれている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、近年の教育学におけるメディア論から国分一太郎の生活綴方の理論的变化を考察し、「現実探求としての生活綴方」を明らかにした点にある。また、国分の生活綴方に限られたものではあるが、断片的に、個人の動向等を中心に論じられてきた北方性教育運動を統一的、理論的に考察することができた点にある。さらに新教育と関係づけることによって、限られた範囲で論じられてきた生活綴方を20世紀以降の哲学や教育思想との関係で捉えることを可能にし、現代的な意義をもったものとして論じることを可能にした点にある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine Kokubun Ichitaro's change from the formation of Seikatsu Tsuzurikata (life composition, as a quest for reality) to a critique of the work, from the viewpoint of the media in recent pedagogy. During an educational movement in northeastern Japan (Hoppousei Kyouiku), Kokubun formulated a theory that emphasized the relationship between language and life. However, in the late 1930s, he criticized Seikatsu Tsuzurikata and only used selected sentence expressions for technical guidance. Moreover, this change was not only apparent in the relationship between language and life but also in the relationship between the child and teacher.

研究分野：教育学

キーワード：現実探求 生活綴方 国分一太郎 北方性教育運動 メディア 新教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年の教育学における生活綴方の再評価

近年、生活綴方が再評価されている。特に今井康雄は1930年代の東北の生活綴方、北方性教育運動が言語をメディアとして捉える「言語=メディア」観に立ち、子ども自身による世界構築を可能とする「現実探求の生活綴方」であると高く評価する。そして、同じ「言語=メディア」観に立ちつつも言語による主体構築を行おうとする新教育に抵抗する可能性を見ている。今井は、国分一太郎によって世間に広く知られることとなった「概念くだけ」に、子ども自身による世界の構築と新教育による主体構築への抵抗を見てとっている [今井：2009]。

今井の指摘は以下の点において重要である。まず、断片的、個人の動向等を中心に論じられてきた1930年代の生活綴方、北方性教育運動を統一的に、理論的に捉えることを可能にする点である。また、生活綴方と新教育の関係を明確にした点においても重要である。確かに、生活綴方による戦後新教育批判はよく知られている。だが、戦後新教育、そして、そもそも新教育と生活綴方の共通性に関してはほとんど論じられていないように思える。さらに、今井の指摘は新教育と生活綴方との関係を戦後期に限られたものではなく戦前から現代までの問題として捉えることを可能にする点においても重要である。新教育との関係から考察することによって生活綴方の現代性を論じることが可能となる。

(2) 先行研究の状況

だが、今井の論考において「現実探求の生活綴方」が十分に明らかにされていないわけではない。したがって、まず「現実探求の生活綴方」を明らかにする必要がある。また、現実探求は子ども一人で行うことができるものではない。綴方指導に見られるように、子どもの書いた綴方を丁寧に読み、不十分な点を問いかけ、子どもに書き直しや書き足しを行うよう促す教師が必要である。子どもと教師との、このやりとりのなかで現実探求が行われ、子ども自身による世界の構築が行われるのである。子どもと教師の、この関係は、主体構築を目的とする新教育との違いに関わるだけに重要な問いとなる。

さらに、1930年代の東北地方における生活綴方、北方性教育運動に関する研究もまた十分に行われているとは言いがたい。すでに書いたように先行研究は断片的なもの、北方性教育運動における個人の動向や運動の展開を明らかにしたものにとどまっているように思える。1930年代の東北の生活綴方、北方性教育運動を俯瞰するような、そして理論的な考察は行われていない状況にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は「言語=メディア」論から国分一太郎の生活綴方の形成、そして1930年代後半における生活綴方批判までの国分の理論的な変化を考察することにある。この背景には、すでに見たような近年の教育学における生活綴方の再評価と1930年代の東北の生活綴方、北方性教育運動に関する先行研究の不十分な状況がある。だが、なぜ国分一太郎を中心に論じるのか。1930年代の生活綴方、北方性教育運動とは東北地方の小学校教師による生活綴方をもとにした教育運動である。その北方性教育運動において国分一太郎は中心として活躍した人物である。さらに、北方性教育運動に関わるなかで実践のみならず、理論的考察を行っているのが国分一太郎である。したがって研究の中心に国分一太郎を据えることで、国分という限られた視点ではあるが、1930年代の東北の生活綴方、北方性教育運動を俯瞰する、理論的な考察が可能になると考えたからにはほかならない。また、戦後国分は新教育批判の代表的論客として活躍し、1985年に至るまで生活綴方に関する多くの文献を残している。したがって、本研究は戦前の国分一太郎の生活綴方理論の形成と変容を対象とするものだが、国分一太郎の生活綴方を中心に据えることで戦後の生活綴方をも視野に入れることが可能となると考えた。

3. 研究の方法

本研究では国分の「現実探求としての生活綴方」の形成と変容の過程を明らかにするために、「北方性教育運動」「児童方言詩論争」「生活綴方批判」を中心に国分の「言語と生活」関係の理論的变化を考察した。すでに述べたように、北方性教育運動とは1930年代半ばの東北地方の小学校教師が起こした生活綴方による教育運動である。この運動に関わるなかで国分は自らの生活綴方理論を形成している。したがって、この運動に関わる過程における国分の理論的变化が何よりも重要な課題となる。そして、この時期における国分の生活綴方理論をより明確にするために児童方言詩論争における国分の位置づけを確認した。児童詩における方言使用の是非をめぐる論争のなかで、国分は方言か標準語を問題とするのではなく「言語と生活」の関係を問題としている。児童詩方言論争における国分の位置づけを明確にすることによって、この時期の国分の生活綴方理論を明確にすることができる。さらに、1930年代後半の国分の生活綴方批判を考察した。1930年代後半、国分は生活綴方の役割を文章表現技術の指導にとどめるべきだと主張する。この国分の批判は、批判以前の国分の生活綴方理論がどのようなものであるのかをより明確

にすると考えた。

4. 研究成果

本研究では 言語 = メディア 論をもとに、国分の生活綴方理論の形成、そして生活綴方批判までの国分の理論的な変化を考察した。考察の結果、生活綴方実践、そして北方性教育運動にかかわる過程で、国分は生活を主観と客観からなるものとして捉えるようになり、そのような「生活」を表現するための言語を模索し、「現実探求としての生活綴方」論を形成したことを明らかにした。そして「言語と生活」に関する、このような理論的变化が「子どもと教師」の関係の変化とともにあったことをあわせて明らかにした。東根の自然や家庭環境において形成された、子どもに共感する国分の資質が国分を北方性教育運動に結びつけ、北方性教育運動に関わるなかで子どもたちを同じ生活台を生きる生活者として捉えさせるようになる。この意識が後に子どものありのままを受け入れる教師のリアリズム的な態度として理論化される。「現実探求としての生活綴方」は、教師の子どもに対する、このようなリアリズム的態度によって可能となる。北方性教育運動に関わる過程で形成された「言語と生活」、「子どもと教師」に関する理論が「概念くだけ」に結実しているように思える。だが 1930 年代後半、国分は生活綴方を批判し、生活綴方を文章表現指導に限定するようになる。国分の、この変化は先行研究において国分の心情的な問題として論じられてきたが、「言語と生活」、さらには「子どもと教師」の関係の変化を含んだものとして捉えることができる。このことを考察してきた。

本研究の意義は近年の教育学における生活綴方の再評価に応えた点にある。言語 = メディア 論の視点から国分の生活綴方の理論的变化を考察し、「現実探求としての生活綴方」を明らかにした。もちろん本研究は、北方性教育運動、そして国分一太郎研究においても大きな意義を持っている。断片的、個人の動向等を中心に論じられてきた 1930 年代の生活綴方、北方性教育運動を、国分一太郎の生活綴方理論を通して、統一的に、理論的に捉えた。さらに、言語 = メディア 論を前提に国分の生活綴方を明らかにすることによって、新教育との関係を論じるための基礎を提供している。新教育と生活綴方が同じ言語観に立ちつつも、「子どもと教師」の関係の相違が、生活綴方を現実探求たらしめ、新教育への抵抗としての可能性をもつことを明らかにした。そして、新教育の思想が戦後のみならず、戦前から現代にいたるまでの教育の理論的枠組みを形作っているとすれば、現代における生活綴方の可能性を論じることを可能にする。

< 引用文献 >

今井康雄「言語 記号からメディアへ」田中智志・今井康雄[編]『キーワード現代の教育学』(東京大学出版会、2009 年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 安部貴洋	4. 巻 49
2. 論文標題 児童方言詩論争と国分一太郎の生活教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育思想	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 安部貴洋	4. 巻 第8号
2. 論文標題 国分一太郎における北方性教育運動の影響 もうひとつのリアリズムを中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「文学」と「教育」の研究	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安部貴洋	4. 巻 第7号
2. 論文標題 国分一太郎の「教えてくれる綴方」 調べる綴方から北方性教育運動への理論展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「教育」と「文学」の研究	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安部貴洋	4. 巻 第45号
2. 論文標題 国分一太郎と調べる綴方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育思想	6. 最初と最後の頁 79-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安部貴洋	4. 巻 第6号
2. 論文標題 「概念くたき」にみる国分一太郎と北方性教育運動	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 「教育」と「文学」の研究	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安部貴洋	4. 巻 第45号
2. 論文標題 国分一太郎の思想形成 綴方教師としての資質とその形成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育思想	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安部貴洋	4. 巻 第12号
2. 論文標題 北方性教育運動に学ぶ/北方性教育運動を生きる	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 みやぎの保育	6. 最初と最後の頁 52-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 安部貴洋
2. 発表標題 児童方言詩論争における国分一太郎
3. 学会等名 国分一太郎「教育」と「文学」実践研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安部貴洋
2. 発表標題 国分一太郎の思想形成 立身出世主義と生活綴方
3. 学会等名 国分一太郎「教育」と「文学」研究会 学習会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安部貴洋
2. 発表標題 1930年代前半における国分一太郎の言語観の変遷
3. 学会等名 第70回全国作文教育研究大会 2022年大阪大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------